

# A Way of Life

## —Seko Koichi—

17号

平成26年3月

世耕弘一先生建学史料室広報

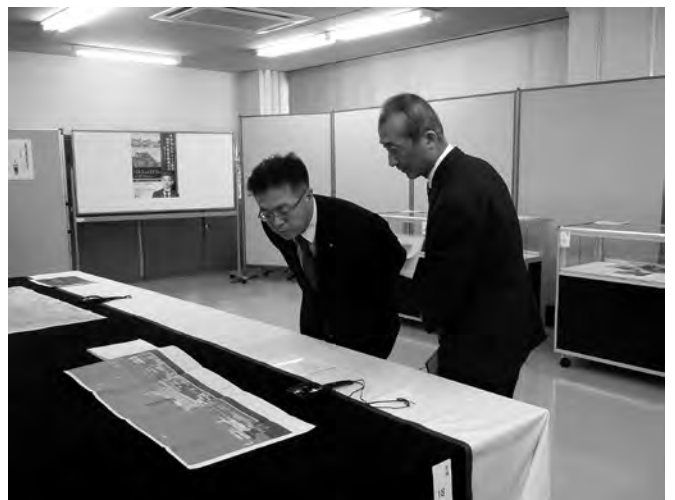
「世耕弘一先生ドイツ留学  
90周年記念史料展示会」  
を開催

世耕弘一先生が大正十二（一九二三）年九月にドイツへ出立され、九十年が経ちました。これを記念し、建学史料室では、「世耕弘一先生ドイツ留学90周年記念史料展示会」を平成二十五年十二月二日から七日まで、本学中央図書館二階第一演習室で開催しました。また、展示会最終日の午前十時三十分から一時間、（近畿大学名誉教授・博士（歴史学）荒木康彦建学史料室研究員による世耕弘一先生ドイツ留学90周年記念講演「おおいなる旅路 Tokyo ~ Berlin 1923」を同館二階第二演習室で行いました。展示会へは、学内外から六日間で三一八人の来場があり、講演会聴講者数は四十九人と盛況のうちに幕を下ろすことができました。

以下、荒木研究員の報告を掲載します。



講演会のようす（右上は演者の荒木研究員）



展示会を視察中の世耕弘成先生

「世耕弘一先生ドイツ留学90周年  
記念史料展示会」および  
世耕弘一先生ドイツ留学90周年記  
念講演「おおいなる旅路 Tokyo  
~ Berlin 1923」のご案内

近畿大学名誉教授・建学史料室研究員  
荒木 康彦

1.

「世耕弘一先生ドイツ留学90周年記念史料展示会」では、以下に掲げるような、荒木康彦が中心になって収集した非常に貴重な一次史料を含む二十八点が展示された。それらの史料については、総計一万四千文字を超える詳細かつ綿密なキャプションが、荒木によって付された。また、荒木によって作成された、「世耕弘一先生のベルリンに至るまで」の表および「マルセイユ・ジュネーヴ・バーゼル・フランクフルト・ベルリン各間の列車時刻表」、以下に掲げる史料19所収の『日本郵船株式會社航路圖』および同じく史料21所収「英國及歐洲大陸交通略圖」の拡大コピーを掲示して、来観者の便宜を図った。

① 世耕弘一先生「昇格運動の憶い出」（桜門文化人クラブ編『日本大学七十年の人と歴史』第一巻 洋洋社 昭和三十五年）（荒木康彦所蔵）

2. 「祝賀會餘興新派主義の争(法科主催)」の写真、「日本大學祝賀會」(大正九年五月十六日、於日本大學) 餘興「二番法科出しもの原惣兵衛作『新派主義の争ひ』」の「役割」のコピー(「日本法政新誌 日本大學祝賀記念號」第十七卷第六號 日本法政學會發行 大正九年六月)(近畿大学中央図書館所蔵)
  3. 朝日新聞本社「自大正十一年至大正十五年 社員異動簿(大阪東京)」所収の世耕弘一先生の欄(朝日新聞社社史編修センター「大阪」所蔵)
  4. 「海外旅券下付表 二一八巻 大正十二年七月至九月」所収の世耕弘一先生の欄(外務省外交史料館所蔵)
  5. 「外国旅券下付願」下書き(荒木康彦所蔵)
  6. 「大正十四年八月二十三日」交付の「日本帝国海外旅券」(近畿大学建学史料室所蔵)
  7. 世耕弘一先生「ドイツ留学の思い出」(桜門文化人クラブ編『日本大学七十年の人と歴史』第二巻 洋洋社 昭和三十六年)(荒木康彦所蔵)
  8. 世耕弘一先生「小林先生との深い因縁」(高山福良・原嶋亮二編『小林錡先生』小林錡先生顕彰會發行 昭和二十八年)(荒木康彦所蔵)
  9. 大正十年当時の「東京駅」の絵葉書(荒木康彦所蔵)
  10. 『公認 汽車汽船 旅行案内 大正十二年七月 第三四六号』(大正十二年七月一日刊行)の復刻版(昭和四十七年 筑摩書房)の東海道本線の東京・大阪間の時刻表(近畿大学中央図書館所蔵)
  11. 大正十年当時の「梅田停車場」の絵葉書(荒木康彦所蔵)
  12. 木下宇陀児著『土性骨風雲録 教育と政治の天下人 世耕弘一伝』(鏡浦書房 昭和四十二年)掲載の大正十二年九月一日に大阪で撮影の世耕弘一先生と御実兄の写真(荒木康彦所蔵)
  13. 『神戸港大観』(神戸市土木部港湾課編 大正十二年十一月一日刊行)所収の大正十二年当時の神戸港の写真三葉(近畿大学建学史料室所蔵)
  14. 「神戸市地圖 付西灘村」(著作印刷兼發行者: 向永寅吉 大正十二年發行)(近畿大学建学史料室所蔵)
  15. THE JAPAN CHRONICLE WEEKLY COMMERCIAL SUPPLEMENT, KOBE THURSDAY SEPTEMBER 13TH 1923 (大阪府立中央図書館所蔵)の第一面及びSHIPPING-LIST OF FUSHIMI-MARUの掲載面のコピー
  16. 写真版の「伏見丸」の絵葉書(日本郵船株式會社發行)(荒木康彦所蔵)
  17. 絵画版の「伏見丸」の絵葉書(日本郵船株式會社發行)(荒木康彦所蔵)
  18. 『日本郵船株式會社創立滿三十年記念帳』(大正四年刊行)所収の「日本郵船株式會社一萬噸型汽船縦断面図」(近畿大学中央図書館所蔵)
  19. 『渡歐案内 日本郵船』(大正十三年五月[?]刊行)(近畿大学建学史料室所蔵)
  20. フランスのマルセイユ港湾地図(ドイツの大型百科事典 Meyers Grosses Konversations-Lexikon 6. Aufl. Leipzig und Wien 1906, Bd.13)(近畿大学中央図書館所蔵)
  21. 『歐洲大陸旅行日程 日本郵船株式會社』(大正十四年發行 昭和二年再版)所収「英國及歐洲大陸交通略圖」(近畿大学建学史料室所蔵)
  22. Cook's Continental Time Table And Steamship Guide, Thos. Cook & Son, October 1923 (大阪府立中央図書館所蔵)掲載のベルリン・フランクフルト間の時刻表のコピー
  23. 一九二三年当時の「ベルリンのアンハルト (Anhalt) 駅」の絵葉書(近畿大学建学史料室所蔵)
  24. Helmut Maier Berlin Anhalter Bahnhof, Berlin 1990 の表紙のアンハルト駅の複合写真(近畿大学建学史料室所蔵)
  25. Baedeker's Berlin and its Environs, Berlin 1923 所収のベルリン地図(荒木康彦所蔵)
  26. Pharus-Plan Gross-Berlin, Berlin 1923. (Reprint) (近畿大学建学史料室所蔵)
  27. 一九二三年発行のドイツ共和国の 1000000 MARK 紙幣(荒木康彦所蔵)
  28. Berlin in Bildern (Aufnahmen von Sassa Stone, herausgegeben von Adolf Behne, Wien und Leipzig 1929) 収録の一九二〇年代後半のベルリン大学の写真(近畿大学建学史料室所蔵)
- で囲った数字の史料は世耕弘一先生御自身の陳述である。①の史料では、先生が「大學令」で大学に昇格した後の日本大学の最初の入学生・卒業生であり、最初の留学生であることが明言されている。⑧の史料は従来知られていなかった刮目に値する史料であり、これによって留学のための神戸からベルリンまでの旅は四十五日を要したことが分かる。
- ゴシックの数字の史料は学外の機関の所蔵になる貴重な一次史料であり、これに依って先生のドイツ留学についての事実確定がなされた点がある。特に4は先生の旅券に関する公的な記録であるため、とりわけ重要であり、先生の旅券番号は「五四九八三一」であること、渡航目的は「學術研究」であること、旅行地名は「佛、瑞、獨」その他であること、下付月日は「八月三日」であることなどが明確に分かる。15の史料によって、先生が渡欧に利用さ

れた伏見丸が一九二三年九月二日に神戸を解纜したことが事実確定できた。これらの史料のコピーの展示許可を与えられた朝日新聞社社史編修センター(大阪)・外務省外交史料館・大阪府立中央図書館(順不同)に、この場を借りて、謝意を表したく思う。

イタリックにした数字の史料は建築史料室所蔵、近畿大学中央図書館所蔵あるいは荒木所蔵になる、その当時に刊行された史料である。これらは刊行史料であるが、ゴシックの数字の公的性格の史料同様に重要な意義を持つものである。例えば、13・14からは世耕弘一先生が神戸を発たれた時の第一岸壁の場所や具体的な様子が分かる。また、18は世耕弘一先生が渡欧に利用された伏見丸の具体的な様子、なканずく先生が過ごされた「二等客室」の様子が分かる貴重なものである。

9・11・16・17・23はいずれも刊行年が確定出来た絵葉書であり、この当時の絵葉書はコミュニケーション・メディアとしての性格を持っており、それ故に今日では史料としての価値が高く評価されている。その中でも23は世耕弘一先生の「おおいなる旅路」の終着駅、第二次世界大戦中に戦禍で瓦解したベルリンのアンハルト駅の一九二三年(裏面のドイツ語通信文の発信年月日と消印から分る)当時の姿を残す非常に貴重な史料である。

その他に特記すべきは、当時ベル

リンを訪れた外国人がよく利用したガイドブックである25(世耕弘一先生がベルリンに到着された年である一九二三年刊行されたもの)には、先生が下宿されたヴィルデ(Wilde)氏があった(⑦の史料による)ヒンデンブルク(Hindenburg)通りが確認できる地図が収録されていることであり、今後取り組まなければならぬ先生のベルリンでの留学生活に関する研究に展望を拓くものである。

## 2.

荒木康彦による世耕弘一先生ドイツ留学90周年記念講演「おおいなる旅路(Tokyo-Berlin 1923)」の概要は、以下の通りである。ここに掲載したような講演概要の報告という性格上、注釈・参考文献などは省いているので、この点は諒とされたい。(読みやすくするために、以下、見出しを適宜付した。)

大正十二(一九二三)年に世耕弘一先生はドイツ留学へ出立されたが、当時お住まいの東京から留学先のベルリンまで一カ月半余りの「おおいなる旅路」であった。この講演では、先生の「おおいなる旅路」に関して、展示史料やその他の史料を引用しつつ、可能な限り実証的に述べた。

## 学生時代

先生のドイツ留学への「おおいなる旅路」の前提をなす、学生時代の先生の御活動とその時代的背景及び留学決定の経緯から、先ず論じた。それによつてはじめて、先生のドイツ留学の歴史的意義を明確に認識できるからである。

木下宇陀児著『土性骨風雲録

教育と政治の天下人 世耕弘一伝』

(鏡浦書房 昭和四十二年)―以下、

『土性骨風雲録』と略称―によると、世耕弘一先生が現中国東北部から東京に戻られ、勤労学生として夜間の正則英語学校に入られたのは、大正六(一九一七)年のことであった。先生は入学の喜びを実感されたが、卒業して大学予科に進むのにあと五年もかかるので、これを短縮したいと思われるようになり、「専門学校受験資格者検定試験」(当時は略して「専検」と呼ばれた)の制度に着目され、これに合格して、中学卒業を待たずに進学することを目指された。その当時、この学校で学びながら「専検」受験を準備する人士がかなりあった。

だが、この「専検」は非常に難関であり、先生が受験された大正七年の東京府の「専検」についての史料はまだ見出し得ないが、大正十年の東京府の「専検」受験者数は百九十九名で合格者は二十二名であり、当時としては非常に難関だったことが分る。大正七(一九一八)年

に先生は、猛勉強の結果、これに見事に合格されて、日本大学予科に入學された。

時代的背景としては、以下の諸点が重要であろう。この時期には、先ず政治的には、「護憲運動」に端を発したいわゆる「大正デモクラシー」運動が都市部を中心に広がり、普通選挙運動も高まっていた。経済的には一九一四年に勃発した第一次世界大戦にはあまり関わらなかつた日本は未曾有の戦時景気に沸き立ち、この時期に工業化が促進されて輸出も盛んになり、特に海運業は活況を呈した。かかる変化は高等教育を受けた多くの人員を要するに至り、大正七(一九一八)年九月に成立した立憲政友会の原敬(一八五六―一九二一)内閣は四大綱領の一つに教育施設の充実を掲げ、文部大臣中橋徳五郎(一八六一―一九三四)のもとで高等教育機関拡充計画が進められた。従来大学は官立大学である帝国大学に限られていたが、公立・私立大学および単科大学の設立も認められることになり、「大學令」が大正七年公布され、翌八年四月一日に施行された。

「大學令」における私立大学についての規定の内、ここで特に関係するのは以下の点である。即ち(1)第六条によれば「私立大學ハ財団法人タルヲ要ス」こと。(2)第七条によれば「財団法人」たる「大學ニ要スル」資金を「生スル基本財産」に該當する現金・証券などを「供託スヘシ」



とのこと・(3)第十七条によれば「相当数ノ専任教員ヲ置ク」べきことである。

「大學令」に基づいて申請した慶應義塾大学と早稲田大学が大正九(一九二〇)年二月五日に、明治大学・法政大学・中央大学・日本大学・國學院大学が同年四月十五日に認可された。認可された大学は「三週間以内」に最低五十万円の基本財産の供託をなさねばならず、日本大学の場合、法文学部と商学部の二学部設置を申請していたので六十万円の供託金を三週間以内に納める必要があり、規模が小さく財政基盤も弱かった当時の日本大学にはそれが困難であった。

因みに認可申請の際に提出された文書によれば、日本大学・慶應義塾大学・早稲田大学の学部学生数はそれぞれ六百五十人・二千八百五十人・二千三百人、学部専任教員はそれぞれ十二人・六十一人・六十九人となっている。かかる状況下で、専門学校令による日本大学の予科の学生の世耕弘一先生は学友二人と相語らって募金活動を熱心に展開され、「三万円ぐらい」を集めて、理事の山岡萬之助(一八七六一―一九六八)のもとに持参したことが、展示史料1では活写されている。

この供託金は五箇年賦でよいこととなり、理事山岡萬之助らの尽力で納められ、前述のように大正九(一九二〇)年四月十五日に日本大学は「大學令」によって認可され

た大学となり、この史料1には先生はそれ以後の最初の入学生・卒業生であるという叙述がなされているのは注目に値する。さらに括目すべきは、この史料の末尾に記されているように、世耕弘一先生は日本大学が大学に昇格した後に最初に派遣した留学生である点である。

この当時に日本大学の経営の中心であった山岡萬之助がこのように多数の卒業生を外国留学させたのは、日本大学は他の私立大学同様に専任教員がきわめて少なく、「大學令」第十七条に抵触するので、これを解消するためであった。派遣費用は日本大学からの費用および校友の寄付金等が充当され、在外研究員の性格を持つものであった。日本大学の留学生派遣先としてドイツが多い理由は、無論わが国がドイツの影響を受けていることが基本的にあるが、第一次世界大戦後にドイツの通貨マルクの価値が低落して、円の価値が相対的に上がったこともある。

大正九(一九二〇)年五月十六日に日本大学の大学昇格祝賀会が新校舎落成祝いなどを兼ねて、同大学で盛大に催され、その余興として法文学部法律科の学生が演じた、原惣兵衛作『新派主義の争ひ』(正しくは、新派喜劇『主義の争ひ』)のシーンの写真が史料2である。この写真のキャプションによれば、舞台右手で手に杖を握り、羽織袴姿で豪快に高笑いしている「花子の父」を演じるのが世耕弘一先生である。

先生は勤労学生として大学生活を送られ、勉強だけではなくて演劇においても、そして雄弁会でも活躍されていた。『日本法政新誌』を精査した結果、先生は大正九年十月十日に日本大学大講堂で開催された「全國大學聯合雄弁大會」で幹事として開会の辞を述べておられたこと、翌十年二月十三日に日本大学大講堂で開催された日本大学雄弁会春季雄弁例会、翌々十一年五月一日に日本大学大講堂で開催された日本大学雄弁会春季雄弁例会で熱弁を振るわれたことなどが見出され、大学雄弁会では日本大学だけではなくて全国的によく知られた存在であったと推察される。先生の日本大学在学中のそうした御活躍は、「大學令」に基づく大学となった後の日本大学の最初の卒業生の中から「日本大学ドイツ留学生」として、先生が同大学の理事山岡萬之助によって選抜された理由となったと拝察される。

先生は大正十二(一九二三)年の大学卒業に際し、三月十七日に朝日新聞東京本社で入社試験を受けられた。受験者は大阪本社を含めて三百五十名で採用は二十五名(東京本社だけでは二十二名)であったことが、『朝日社報』八十五号(大正十二年四月二十日印刷)に掲載されている。先生は採用され、前掲の『土性骨風雲録』によれば、短期間大阪本社に、その後は東京本社の経済部に配属され、経済記者として令名のあった牧野輝智(一八七九―

一九四一)経済部長のもとで「記者見習」として活動された。

留学に向けて

そうした中で、史料7の「ドイツ留学の憶い出」にあるように、先生は日本大学の理事山岡萬之助から「大正十二年四月末」に「ドイツ留学の内命をうけた」のであった。そこで、朝日新聞社と日本大学との間に協議がなされた模様で、史料3にあるようなことで決着がつけられたと拝察される。この史料は大阪・東京朝日新聞本社の大正十一年から大正十五年までの人事異動に関する記録であり、大正十二年の部分に世耕弘一先生に関する史料が収録されている。「発令月日」の欄には「大阪朝日新聞社総務局文書課 12. 7. 11」のスタンプがあり、「給与」は「報酬無し」、「氏名」は「世耕弘一」、「辞令」は「在欧中通信ヲ囑託ス」、「所属」は「私立日本大学独乙留学生」、「職名」は空白などとなっている。したがって、これは日本大学のドイツ留学生としての世耕弘一先生が、大正十二年七月十一日に朝日新聞社から報酬無しで在欧中に通信を囑託されたことを示す、決定的な史料である。

このような段階で、先生がなされるべきことは旅券の申請であった。この当時の旅券申請の規則に従って、世耕弘一先生は外国旅券下付願(史料5のような)・戸籍抄本・

上半身の写真二葉・「旅券手数料」十円を東京府に提出されたと推察される。外務省は旅券を交付し、その結果を「海外旅券下付表」という一覧表を作成している。その「二一八巻 大正自十二年七月至九月」の東京府の十九丁裏に先生の項目がある。即ちそれが史料4であり、「旅券番號」は「五四九八三二」、「氏名」は「世耕弘一」、「身分」は戸主である御実兄の弟、「本籍地」は和歌山県の御出生地、「年齢」は「卅年六月」、「保証人」はこの時代は不要で空欄、「旅行地名」は「香港、新嘉坡、馬按加、彼南、古倫母、蘇土、坡西土、佛、瑞、獨」(ホンコン、シンガポール、マラッカ、プナン、コロンボ、スエズ、ポルトサイド、フランス、スイス、ドイツ)、「旅行目的」は「學術研究」、「下付月日」は「八月三日」となっている。

わが国で旅券が今日のような「手帳型」になったのは昭和元(一九二五)年のことであるので、世耕弘一先生に大正十二年八月三日に交付された旅券は、展示史料6のような縦二十六センチ・横四十七センチのいわゆる「賞状型」の旅券だったはずである。しかも、表の右側の「日本帝国海外旅券」の日本語表記の部分の右肩には「五四九八三二號」と印刷され、文言の一行目の「右ハ」以下には、學術研究のために香港、新嘉坡、馬按加、彼南、古倫母、蘇土、坡西土、佛、瑞、獨へ、といったような文言が墨書されている

たと思われる。裏の右側には先生の上半身の写真が貼付されていたはずである。「賞状型」旅券は専用封筒に入れて携帯されたが、持ち運びに不便で評判が悪かった。

史料7は、先生のドイツ留学に至る経緯・ベルリンでの生活などを知る唯一の確実な史料であり、ここでは以下の四点が重要である。即ち(1)日本大学の理事山岡萬之助から「ドイツ留学の内命をうけたのは大正十二年四月末のこと」、(2)「東京を出発したのがその年の八月三十一日」であったこと、(3)「神戸から出航する欧州航路の伏見丸」という船に乗ってドイツに向かったこと、(4)「伏見丸では小林錡さんと一緒にであったが、小林さんとは一緒に日本を發つて帰国する時も一緒にであった」ことの四点である。

史料8は、衆議院議員の小林錡(一八八八—一九六〇)に対する世耕弘一先生の追悼文であり、二〇一二年五月に荒木によって発見された。史料7で触れられていない二つの点、即ち「独逸に留学の時は同時に神戸で乗船、船室も二等で同室」であった点、「日本をはなれてベルリンに着くまで四十五日間」要した点が活写されていて、非常に興味深い史料である。

#### 旅立ち

かくして留学準備の整った先生は、7の史料によれば、「東京を出

発したのがその年の八月三十一日、ちょうど関東大震災の前日」であった。当初は九月一日に出発の予定であったが、『土性骨風雲録』によれば、友人の忠告を容れて、一日早められ、八月三十一日の夜汽車で東京を發たれたとのことである。史料9の繪葉書は大正十(一九二一)年当時の東京駅を撮影したもので、自動車が多くなるのは関東大震災の後からで、当時は市電と人力車が都市内の主な交通手段であったことが分る。

史料10は大正十二年七月一日刊行の時刻表であるので、ここに掲載された、夕刻から深夜にかけて東京を發ち翌日午前中に大阪に到着する六本の夜行急行列車のいずれかで、先生は九月一日に大阪に到着されたのであろう。当時は急行でも東京・大阪間は十二・三時間ほどかかっている。

前に掲げた『土性骨風雲録』によると、九月一日に史料11の繪葉書にあるような大阪駅に到着された先生は、当時大阪に住まわれていた御実兄の世耕良一氏を訪ねられ、同日記念撮影をしておられ、それが史料12である。真に舐(な)められたというべき断固たる表情である。

そして、史料7では「大阪で昼食をしている時にグラグラと揺れ出したが、まさか東京が、あんな大きな被害を受けようとは思わなかった。」とあり、それは無論関東大震災の揺れであった。翌二日に先生は神戸に行かれ、乗船前に関東大震災による

東京の被害が甚大であるとの報に出発を逡巡された。『土性骨風雲録』によると東京の山の手は被害が小さかったとの情報で御家族の無事を確信され、予定していた日本郵船株式会社の伏見丸で同日神戸を解纜された。

史料13は大正十二年刊行の神戸市土木部港湾課編『神戸港大観』で、これに収録の三枚の写真の内の中段のもので右端に霞んで写っているのが一番突堤であり、ここに日本郵船の船舶は接岸していた。

史料14である大正十二年発行「神戸市地圖」を見ると、港には第一突堤・第二突堤・第三突堤・第四突堤があり、いずれにも鉄道の引き込み線が敷設されている。第二突堤・第三突堤・第四突堤には貨物を収納する上屋が多数あるが、日本郵船の船舶が接岸する第一突堤の東側の岸壁付近には建物はない。この岸壁に係留した伏見丸に先生は搭乗されて欧州に向かわれたことになる。

史料15は一九二三年九月十三日に神戸で發行された英字新聞に掲載された船舶情報であるが、その出航の欄のSeptember 2nd. (9月2日)の部分にFushimi-maru, 1093(sic) J, for London-N.Y.K. (伏見丸, 1093トン, ロンドン向け, 日本郵船)と報じられている(10993という伏見丸のトン数は誤りであり、10930トンが正しい)。また、伏見丸はマルセイユを経由して、ロンドンに向っていたことが分かる。



史料15によって、先生が搭乗された伏見丸が一九二三年、即ち大正十二年九月二日に神戸を出航したという事実確認が出来たことになる。史料16・17である日本郵船発行の絵葉書において、その伏見丸の航行する姿を見ることが出来る。

史料8において「日本をはなれてベルリンに着くまで四十五日間」要したと述べられているので、神戸解纜からベルリン到着まで四十五日要したということになる。そして、史料19の『渡歐案内』所収の「欧州航路豫定航海日数及距離」によれば、欧州航路に就役していた日本郵船の伏見丸等の一万トンクラスの船舶は、神戸から四十三日目にマルセイユ着となっている。したがって、先生はこの「四十五日間」のうちの初めから四十二日と何時間かは伏見丸で過ごされたということになる。

「大正十二年七月一日刊行」の史料10に掲載された日本郵船「蘇西經由歐洲線船客運賃表」によれば、神戸からマルセイユまで「一等」では「一〇〇〇円」、「二等」では「六七〇円」、「特三等」では「四九〇円」、「三等」では「三三〇円」となっている。したがって、世耕弘一先生の場合、同年九月二日神戸発の伏見丸のマルセイユまでの運賃は六百七十円であったと判断される。

### 船と鉄道の旅

史料8では、先生は小林錡と「独

逸に留学の時は同時に神戸で乗船、船室も二等で同室」とされており、史料18の『日本郵船株式会社創立満三十年記念帳』収録の非常に克明な「日本郵船株式会社一萬噸型汽船縦断面図」において世耕弘一先生が利用された「二等客室」を確認できる。船尾部分に四室あり、各室に二段ベッドと椅子とが置かれており、そのいずれかを先生は小林錡と共同で使用されたことになる。この居住性は必ずしも良くなかったようである。この史料8には、湿疹に罹った小林錡に先生が薬を貼付されていたこと、コロソバ付近では御兩人とも熱病に冒されたことが陳述されている。しかし、船が地中海に入ると気候も良くなり、御兩人とも健康を回復され、そして四十三日目、即ち十月十四日には遂に搭乗されていた伏見丸はマルセイユに入港したと判断される。

マルセイユでは、当時すでに地中海の海岸線とそれに沿って築かれた長大な防波堤から近代的な港湾が構築されており、展示史料19の『渡歐案内』の「寄港案内」の記述では、伏見丸などの日本郵船の船舶はその左端から進入し Basin de la Gare Maritimee (海上の駅の船溜まり) の第八岸壁に接岸したとされており、史料20のマルセイユ港の地図にその船溜まりを確認出来る。かくして、世耕弘一先生は伏見丸でマルセイユに到着され、ヨーロッパでの第一歩をこの岸壁に印されたという

ことになる。

マルセイユに上陸後からベルリンに至る陸上の旅については、史料7・8・12のいずれにおいても言及されていない。だが、日本郵船が自社の船舶で渡欧する客に配布した史料21にその手がかりを見出すことが出来る。この史料に収録されている「歐洲大陸旅行案内」にマルセイユからヨーロッパ主要都市までの旅行ルートが挙げられており、そこに「馬耳塞より伯林へ(一千五十六哩)」として「馬耳塞より獨逸に行かうと考えらる、旅客は Lyons 及び Geneva を経て Bale に至り…此の Bale から獨逸の各方面」に行くことが出来る、「目的が伯林行なら最上旅程は Carlsruhe 經由であります。」と記載されている。

この史料の末尾に収録されている「英國及歐洲大陸交通略圖」を参照しても明白なように、このカールスルーエから北に線路が伸び、フランクフルト (Frankfurt) に至っている。実は、このフランクフルト・ベルリン間の路線は、ドイツの鉄道の幹線中の幹線なのである。以上から勘案すれば、当時、鉄道でマルセイユからベルリンに赴く場合、リヨン・ジュネーヴ・バーゼルを經由してドイツに入り、カールスルーエ・フランクフルトを經由して行くのが、きわめて一般的だったと言える。そして、こうした一般的なルートが史料21で推奨されており、それらを踏まえて、世耕弘一先生は海外旅券の申

請の際に、ヨーロッパでの旅行地として「佛、瑞、獨」を記載されたのであろうと思われる。

史料8において神戸からベルリンまでは四十五日を要したとされていること、史料19において神戸解纜から四十三日目にマルセイユに入港するとされていることに立脚して、以下議論を進めたい。鉄道でマルセイユからリヨン・ジュネーヴ・バーゼル・フランクフルトを經由してベルリンに赴く場合、具体的にどのような時刻の列車を乗り継いで行けば、二日と何時間かでそれが可能なのかということである。

史料21の冒頭部に当時すでに世界的に営業を展開していた旅行会社であるトーマス・クック (Thomas Cook) 社のサービスについての言及があり、「汽車賃、ホテルの室及び食事代を含んだクーポン (Coupon) がトマス・クック (Thomas Cook & Son) で買われます、歐洲旅行には同社の世話になることが一番良い様であります。」とされている。そこから推測できるのは、世耕弘一先生と小林錡のマルセイユからベルリンまでの鉄道旅行もトーマス・クック社のサービスによるもの可能性があるということである。

個人的に乗り継ぎ場所で次々と切符を購入するのは煩雑でもあるし、当時の日本人は欧州での旅行の際にトーマス・クック社をよく利用しているのが種々の史料から分るからである。また、この史料21に付録

として掲げられている、マルセイユから欧州各地までの鉄道料金表によれば、マルセイユからベルリンまでは、一等車が九ポンド四シリング六ペンス、二等車が六ポンド四シリング六ペンスとなっており、先生の「ドイツ留学の憶い出」では伏見丸では「二等」であったとされているから、列車の場合もやはり二等車であった可能性が高いので、当時の為替レートから算定すると、約六十八円十銭ほどとなる。

大正十三年にやはり伏見丸でマルセイユに着いた東洋史学者の内藤湖南こと内藤虎次郎（一八六六一—一九三四）は二時間足らずで通関手続きを終えて市内に入っており、同年に日本郵船の白山丸で四月七日の早朝にマルセイユ港に着いた法哲学者恒藤恭（一八八八—一九六七）は午前九時頃に「税関の検査」を受けて市内に入っている。ここから、マルセイユの通関手続きは比較的短時間で済み、市内に入れたことが分る。

一八七三年以来、トーマス・クック社はヨーロッパ大陸の鉄道の時刻表を刊行しているので、一九二三年刊行の同社の時刻表を博捜してみた結果、海外諸国の種々のアーカイヴズなどにもこれを見出すことはできなかつた。だが、全く意外且つ幸運なことには、同社が刊行した一九二三年十月版のヨーロッパ大陸の鉄道の時刻表を大阪府立中央図書館で見出すことができた。それが史料22である。

この時刻表に掲載されているマルセイユ発ジュネーヴ行、ジュネーヴ発バーゼル行、バーゼル発フランクフルト行、フランクフルト発ベルリンの列車の中の急行を中心にしてリストアップして考察してみると、マルセイユ発ジュネーヴ行の三本の急行の内、結論的に言えば、四十三日目の午前中にマルセイユ港に着いて通関手続きを終えて、十二時十分発の列車に乗った場合のみ、四十五日目にベルリンに到着することが出来るのである。即ち十二時十分マルセイユを發つて二十三時三十二分にジュネーヴに到着し、翌四十四日目零時四十七分にジュネーヴを發つて六時二十七分にバーゼルに到着する。

ここからは二つの可能性があり、その一つは十時四十五分にバーゼルを發つて二十三時四分にフランクフルトに到着し、四十五日目七時二分にフランクフルトを發つて十七時二十六分にベルリンに到着する。もう一つは四十四日目十九時三十五分にバーゼルを發つて四十五日目七時四十分、四十分、五分に到着し、この四十五日目十三時二十分にフランクフルトを發つて二十二時五十分、五分にベルリンに到着する。このいずれかで先生は四十五日目にベルリンに到着されたと思われる。

ベルリン

史料22のトーマス・クック社のこ

の時刻表によれば、当時ベルリンに乗り入れる殆どすべての長距離列車が到着することになっていたアンハルト（Anhalt）駅に、先述の二本の列車も到着するとされている。史料23の絵葉書がまさしく一九二三年当時の同駅の姿である。この絵葉書の裏にある「ベルリン 23年7月23日午後10〜11時」の消印と「23年7月23日」の通信文の日付からそれが非常に貴重な史料である。先生はこのアンハルト駅中央出入口のポーチを潜られて「おおいなる旅路」を終えられたのである。

事実上のベルリン中央駅であったアンハルト駅は、第二次世界大戦中に空爆で破壊され、冷戦時代にベルリンが東西に分割され、東西ベルリンにそれぞれ事実上の長距離発着駅が生じたので、放置された。東西ドイツが統一してから新たなベルリン中央駅が建設されたので、壮麗なアンハルト駅舎は中央出入口のポーチが残存するに過ぎず、史料24の書籍の表紙にある通りの姿である。現在残存する中央出入口のポーチ部分の写真と戦前に撮影された駅舎の写真とを合成した、大変興味深い写真である。

すでに述べた通り、史料8において日本を離れてベルリンまでは四十五日要したと陳述されていること、史料15によって、先生が搭乗された伏見丸が一九二三年、即ち大正十二年九月二日に神戸を出航したという事実確認が出来ていることか

ら、先生のベルリン到着は、即ち先生の「おおいなる旅路」の終わりは一九二三年十月十六日であったと推測される。そして、この日から足掛け五年におよぶ先生のベルリンでの留学生活が始まる訳であり、この時期のドイツの状況を踏まえつつ、それについての私の研究の見通しについて言及して終わりたいと思う。

その前にこの「おおいなる旅路」の数字的総括をしておきたい。まず、移動距離は東京・神戸間が約三七三・五哩（当時の時刻表では興味深いことに距離は哩表示である）即ち約六〇一・〇九km、神戸・マルセイユ間が約九七七・三哩即ち約一八〇九九・六〇km、マルセイユ・ベルリン間が約一〇五六哩即ち約一六九九・四七kmで、総計約二〇四〇〇・一六kmの文字通り「おおいなる旅路」であった。次に「おおいなる旅路」の交通費は、鉄道が日本も欧州も二等と仮定するならば、日本が十四円三十五銭、欧州が約六十八円十銭ほどであり、船賃は六百七十円であるので、総計約七百五十二円四十五銭ほどであったと言えよう。

さて、話を戻して、この時期のドイツの状況を踏まえつつ足掛け五年に及ぶ先生のベルリンでの留学生活についての私の研究の見通しについて言及し、終わりにしたい。先生が下宿されたヴィルデ（Wilde）家があったヒンデンブルク（Hindenburg）通り（現在では改称



されてAnn Volkspark)は史料25・史料26の地図に確認できる。同家は戦前には豊かな中産階層に属していたのに、人を下宿させるような状況になってしまったとヴィルデ夫人が事ある毎に嘆いていたと『土性骨風雲録』に述べられている点は注目し値する。関東大震災を幸運にも免れて留学先のベルリンによく到着された先生は、大きな世界的な経済の変動に遭遇された。即ち、あの名高いハイパーインフレーションがそれである。

第一次世界大戦に敗れたドイツは「天文学的数字」と評された千三百二十億マルクの賠償金を課せられた。それは敗戦国ドイツの経済的能力を超えるもので、賠償支払いは当然遅延し、それを理由にフランス・ベルギー軍がドイツ工業の心臓部とも言うべきルール地方を占領し、ドイツ共和国のクーノ内閣はルール地方の住民にサボターージュなどのいわゆる「消極的抵抗」を呼びかけた。その政策は失敗であり、ドイツの経済は破綻し、この年に急激なハイパーインフレーションが進行した。

リンに到着された直後の同年十月二十二日には四百億マルクとなった。シュトレーゼマン内閣によって不動産を基礎とする暫定的な不換紙幣レンテンマルク(Rentemark)が同年十一月に発行され、一兆マルクと一レンテンマルクが交換され、他の経済政策の効果もあり、翌一九二四年初めにハイパーインフレーションがまことに奇跡的に終息した。こうしたハイパーインフレーションは、特に当時のドイツの中産階層に大打撃を与え、先生の下宿先のヴィルデ家の夫人が悲嘆に暮れたのはこうした経済的背景があった訳である。

こうした中で先生は史料7の「ドイツ留学の思い出」で、史料28にあるようなウンター・デン・リンデン(Unter den Linden)通りのベルリン大学の教室に通うのと同時にレオンハルト(Leonhardt)通りのプリル(Priil)教授宅にも頻繁に出入りされ、ドイツという国をしっかりと見てドイツ語をしっかりと勉強しておくようにとの「ドイツ留学の秘訣」を同教授から授かり、忠実にそれを実行されて留学中は幅広く勉強されたと拝察される。先生は一九二七年初めまでベルリンに滞在されたが、その頃にはドイツの経済は立ち直り、議会制民主主義による政治もそれなりの安定を見せ、いわゆる「ヴァイマル共和国の相対的安定期」が現出するのである。

そうしたドイツの経済的・政治的

現実のダイナミックな歴史的展開を世耕弘一先生は恩師プリル教授の忠告に従って確かと考察されたと拝察される。その時代の知見は、先生が穏健な自由主義の政治家として、周知の如く特に第二次世界大戦中・戦後に大車輪の活躍をされたことの礎となったと確信する次第である。そうした意味を持つ世耕弘一先生のドイツ留学中の御活動は、今後時間をかけて仔細に考察し、他日何らかの形で報告致したいと思う。

### 大学アーカイヴズと校史関係 史料に関する建学史料室研究

#### プロジェクトの開始について

副学長・経営学部教授

建学史料室研究員

増田 大三

平成二十五年十月一日に教員十人(増田、法学部准教授 上崎哉、経済学部准教授 藪下信幸、経営学部教授 稲葉浩幸、文芸学部教授 鈴木拓也・准教授 酒匂康裕、教職教育部教授 富岡勝、短期大学部教授 田窪直規・教授 井田泰人、九州短期大学准教授 三木一司)は建学史料室の兼務発令を受け、研究プロジェクト「近畿大学の大学アーカイヴズと校史関係史料に関する調査・研究」に従事することになりました。

十一年後の平成三十七(二〇二五)

年に本学は創立百周年を迎えます。この百周年に向け、校史に関わる史料を収集していく必要が一層高まっていくことが予想されます。

すでに本学では文書保存規程によって「校史編纂の参考となる文書・資料で重要なもの」を永年保存することが定められ、校史関係史料を保存する基本的な仕組みが作られています。

今後は百周年に向けて、この仕組みを生かしながら、各部署にすでに保存されている史料に関する全学レベルの情報共有や、どのような文書が校史編纂にとって重要なのかに関する具体的検討が行われ、校史関係の史料の適切な保存・整理・活用が進められていくことが求められるようになると思われまます。

また、東大阪キャンパス内の本館などの建て替え工事に伴って、貴重な校史関係史料が失われないように努めていくことも期待されるでしょう。

こうした状況に鑑み、本研究プロジェクトでは、校史関係史料の収集・整理や、将来的な大学アーカイヴズ(校史関係史料を含む)を永年保存を過ぎた学内文書を適切に整理・保存・公開する機関)に関する基礎的な調査・研究を実施していきます。具体的な活動としては、まず主要課題として、学内各部署のご協力を得ながら学内の史料の見学調査や整理方法の検討に取り組みます。

さらに、校史関係の学外資料の調



査・収集、学外のアーカイヴズの訪問調査、学内公開研究会の実施なども計画しています。

本誌において、調査・研究の進行状況をきめ細かく報告していきたいと思えます。本学に関係するすべての皆様のご理解とご協力を心からお願いいたします。

### プロジェクト 活動報告

#### 第一回勉強会

(平成二十五年十一月十一日)

勉強会の開始に伴い、学内外の資料収集、学外訪問調査など平成二十五年年度の勉強会活動内容について話し合った。他にも研究成果の公表手段や建学百周年に向けた仮工程表についての提案などが行われた(経営学部教授・建学史料室研究員 稲葉浩幸、経済学部准教授・建学史料室研究員 藪下信幸)。

#### 第二回勉強会

(平成二十五年十二月十一日)

平成二十五年年度の調査スケジュールを確認し、研究・調査の役割分担と印刷物の掲載記事について話し合った。その他、平成二十六年度予算案、関西教育学会での発表、全国大学史資料協議会西日本部会研究会への参加などが報告された。(短期大学部教授・建学史料室研究員 井田 泰人)。

### 各地のアーカイヴズ紹介 1 — 創立90周年を迎えた滋賀大学 経済学部の二つの取り組み —

教職教育部教授・

建学史料室研究員

富岡

勝

本研究プロジェクトでは、本学において本格的な大学アーカイヴズ(保存年限終了後の大学事務文書などを収集・保存・公開する組織)の設置が検討される際に備え、各地のアーカイヴズ(大学や地方自治体の文書館や史料館など)に関する訪問調査を実施していくことが計画されている。そこで、調査で知った各アーカイヴズの最新動向を毎号少しずつ紹介し、本学の特色を生かした

大学アーカイヴズづくりに少しでも役立てるように努めていきたい。

今回紹介するのは、滋賀大学経済学部の取り組みである。同学部は、一九二三年(大正十二年)に設置された彦根高等商業学校を母体としている。昨年に創立90周年を迎え、同学部の附属史料館で企画展示「彦根高商の日々―聞け黙々として語る史書(ふみ)―」を開催している。筆者もJRに乗って見学に行ってみた。彦根高等商業学校時代の教科書、試験問題、学生生活の写真、一九四三(昭和十八)年の学徒出陣壮行会での送辞・答辞などの現史料が数多く展示されており、当時の学生生活をまざまざと思い浮かべることができた。

同史料館は彦根高商時代に設けられていた近江商人研究室を母体に、

からの提供やキャンパス内での発見などを通じて校史関係の史資料を収集し続けている。こうした史資料を基盤にして近い将来、滋賀大学内に本格的な大学アーカイヴズが作られる可能性もあるのではないかと想像される。

また同学部経済経営研究所のホームページ内にはデジタルアーカイブがあり、彦根高等商業学校関係の史資料(文書・刊行物・卒業アルバムなど)が公開されている。卒業アルバムなどの内容をそのままデジタル画像で公開するというのは個人情報などの問題から容易なことではないと思われるが、著作権の帰属、利用目的の限定などについて利用内規でルール化しておくことで公開を実現している。このデジタルアーカイブの取り組みも大学アーカイヴズの活動を先取りしたものといえよう。

滋賀大学経済学部の二つの取り組みを通じて、大学アーカイヴズの設置を構想しつつ、その実現前から大学アーカイヴズの活動を実質的に一部先取りして実施することも可能であり、有意義であることがわかった。来年の二〇一五年に創立90周年を迎える本学でも負けていられないのではないかと、と思われた。



滋賀大学経済学部附属史料館の外観

一九五〇年に主に滋賀県下の経済史等に関係する史資料の保存・活用を目的に設けられている。したがって同史料館は厳密な意味では大学アーカイヴズとはいえないが、同窓会会員

米国立公文書館所蔵「同交  
会之記」について ― 鳩山一  
郎氏救済のための世耕文書 ―

このたび、国立国会図書館東京本館憲政資料室にマイクロフィルムに撮影された「同交会之記」が所蔵されていることがわかり、その複写を入手することができた。そして、そのオリジナルの「同交会之記」は、米国立公文書館に所蔵されていることが判明した。

この資料は、以前本誌においてご紹介した東京大学法学部所蔵「同交会記 昭和廿一年五月十五日記」の原本といえるもので、世耕弘一先生が鳩山一郎氏を公職追放から救済するためにGHQに提出した自筆文書である。

〔「同交会記」について〕本誌七号 平成十五年四月 八頁参照。)

米国立公文書館は、正式名称をNational Archives and Records Administration = NARA (「国立公文書館・記録管理庁」といい、アメリカ合衆国の歴史的資料の保存および閲覧サービスのみならず、連邦各省庁の記録管理を指導、監督する機能を有する機関である。

この文書の書誌事項は、次のように記述されている。

IPS Doc. No.2323: DOKOKAI (A Pacifist Society), by SEKO, Koichi Source: HATOYAMA, Ichiro  
文書名: GHQ/SCAP Records.

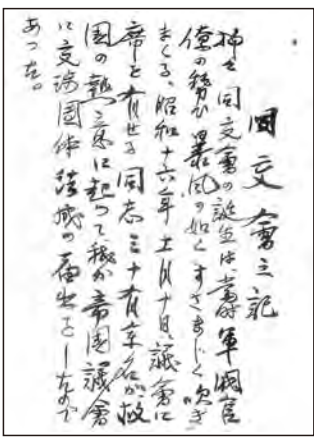
International Prosecution Section = 連合国最高司令官総司令部国際検察局文書: Entry No 329 Numerical Evidentiary Documents Assembled as Evidence by the Prosecution for Use before the IMTFE, 1945-47

また、この文書には、世耕先生の自筆の墨書による「同交会之記」とともに、その英語訳が添付されていた。自筆の文言については、多少の異同があるものの、戦時下において議会での言論の自由を守るために戦った同交会結成の経緯について詳細に述べられた内容であり、これまで紹介されてきたものとはほぼ一致した文書であった。この文書が、米側資料の中から新たに発見されたこととの意義は、改めて言うまでもないであろう。

この文書によって、長年の同志であり、盟友であった鳩山一郎氏の窮地を救わんとする世耕先生の懸命な思いを、その筆跡から読み取ることができる。

中央図書館・建学史料室

寺尾 隆



附属豊岡高等学校  
生徒の感想文

自校教育の実施

附属豊岡高等学校進学コースでは、平成二十五年度から、自校教育を実施しています。近畿大学の建学の精神、教育の目的などを学び、附属高校の一員として、本学園で学ぶことの誇りや喜びを持たせ、自己実現に繋げるための一連の教育・学習活動と位置づけています。

一学期に一、二年生で実施した自校教育の建学の精神の中の、世耕弘一初代総長の人生に学ぶ「(1)生い立ちを中心に」と「(2)不屈の政治家・近畿大学の設立」の二時間の授業の感想です。

近畿大学附属豊岡高等学校

二年 小川 美稀

この話を読んで、今までの勉強に對しての考えが変わりました。世耕先生は、中学へ行きたいという志をもって、必死に勉強していて、私とは全然違うなと思いました。特に目指している所もなく、勉強に對して一生懸命取り組んでいなくて、世もなんとなく生活しているので、世

耕先生の生き方はとても立派だと思ふし、苦勞もすごいだろうと思ふいます。それに中学進学ができなくなり、夢があっさり絶たれてしまつても諦めず、絶対に中学に行くという気持ちを強く持ち続けることは簡単な事ではないだろうと思ふました。私は今まで勉強に必死になつたことがなくて、テストに關しても、欠点でなければいいと思つて、あまりやらなかつたり、真面目にしたりしてないのでこれからは何か目標に向かつて必死になりたいと思ふいます。勉強をしている時にはとてもつらいと思ふけど、そのつらさ乗り越えれば、楽しいことがあると思ふので、これから生きて行く中で色々あると思ふけど、頑張つていきたいです。

二年 尾畑 佳奈子

世耕弘一先生の話を読んで、すごい努力家だと思ふました。中学へ進学したいという夢を持っていましたが、一度は夢が絶たれてしまつたけれど、「負けてたまるか」という強い気持ちにとっても感動しました。

数年たつて営業現場を取り仕切るまでになつていたつてことは、それだけ頑張つたんだらうなと思ふました。一番びっくりしたのは、大学に入り学問をするという夢を捨てず



まで勉強がしたいという気持ち私が私には理解できませんが、これだけ強い気持ちで学びたいと思うことは、すばらしいことだと思えます。

私は、近大の高校に入学して初めはなにも知りませんでした。近大は世耕弘一先生という立派な方が始められた学校ということをやっと覚えておきたいです。

これからの学校生活を有意義に過ごしていければいいと思います。

二年 戸田 裕香

勉強がとても好きだから何にでも一生懸命頑張れて最終的には大学を創るといふすごいことを成し遂げられたんだろうなと思いました。好きなことには誰でもいくらでも取り組めるんだと思いました。そして世耕弘一先生は何事にも積極的に取り組んでほしいなと思います。私は積極的に進んで何かをしたりするのは苦手なので自ら海外留学を決めて留学したりするのはすごい勇氣があるなと思いました。

私と同じ歳ぐらいの時に私の何十倍も苦労されていたんだと思います。今の時代高校や大学に行くのは結構あたり前に行けるのに当時は行かなくても普通といった感じでなかなか変な感じだなあと思いました。高校や大学へ行かなくてもかしくくてその上大学教授にもなったなんて、

生まれ持った才能だとしてもすごいと思います。家族の方々も田舎から息子を送り出すのはさみしかっただろうなと思えました。家族の協力はとても大きいものだと思うので世耕弘一先生にとつてもすごく心強いものとなったと思います。

二年 山田 陽香

小さい頃から苦労してきた人は苦しいことも乗り越えられるんだなと思いました。すごく勉強が好きでそんな好きになれてうらやましいです。壮大な夢を実現するためには多額の資金がいるため、満州(現中国東北部)に住んだ行動力もすごいなと思いました。世耕弘一先生のまわりには優しい人が多くいたのも夢を実現できた理由でもあると思います。三人の兄からお金をもらったり、お母さんからかつお節が送られてきたりと支えがあったからだと思います。世耕弘一先生の苦労やがんばりを見ていてくれた人もいい人だな小सानががんばりでも見てくれる人がいるんだなと思つて私もそんなことができる人になっていきたいなと思いました。

世耕弘一先生のお母さんが言った言葉が印象に残りました。勉強も部活もなまけたらどちらもいい成績にはならないと思うので、私もがんば

ろうと思えました。

二年 山下 浩輝

今回、自校学習二回目ということ。世耕先生のドイツ留学からのお話を読みましたが、あらためて日本を動かす能力のあるすばらしい人だと思いました。僕はこの資料を読んで特に興味を引いたのは、世耕先生の政治家としての行動です。誰しも国民のため、人のために何かをしたいという気持ちは少なからずあると思います。今の政治家はそのような思いを持っていても、自分の名前を傷つけたくない一心でなかなか実行してくれません。でも世耕先生は違いました。自分の事など二の次、とにかく国民、国民第一の考えの持ち主でした。東条政権への反骨、第二次世界大戦後の隠退蔵物資の摘発、まさに日本の未来を大きく変えるような仕事をしてくれたと思います。

僕が世耕先生から学んだことは常に自分に素直に行動し、常に清廉潔白であり続けることだと思えました。このようなことを意識して日々の生活を送りたいです。

二年 岩崎 善起

世耕先生の気迫や意思の強さは、すばらしい物があると思います。

先生の苦労はすごいと思えました。当時、泣く子も黙る東条内閣とも真向に自分の意見をぶつけ、自分の意志を貫く姿勢は皆にももつと必要な能力だと思いました。自分の意見をはっきり言い、意思を貫くその姿勢に心を打たれました。

相手の大きさに一度は選挙を落とされてしまつても、次には返り咲いて大手の不正を取り締まり、不正は不正だと、正義のために、自分の近い立場の人も、真向から倒す。そういうところにあこがれを抱きました。

おおきな思いは人を動かすとわかりました。かなり過激な事をして、内部からは嫌われる事も多かったと思いますが、国家のために、自らの事は考えず動きまわっていたのは、読んでいてかっこいいと思えました。世耕先生という人は人間としての義が通つていると思えました。

### 不倒館を訪れた方々

世耕弘一先生の肖像画と人力車を囲んでの写真撮影が好評です。今回は、平成二十五年九月二十九日開催のホームカミングデーに訪れた近畿大学体育会柔道部OGの皆さんと、同年十一月二十三日に実施された附属学校サッカー交流戦のキャンパス見学で来館した附属和歌山高等学校サッカー部の生徒の皆さんを紹介します。



ホームカミングデーでの近畿大学体育会柔道部OGの皆さん



附属学校サッカー交流戦で訪問の附属和歌山高等学校生徒の皆さん

### 不倒館入館者数の報告

平成二十一年九月に開設以来の不倒館入館者数を年度別で報告します。

平成二十一年度	一九五一人
平成二十二年度	二四四六人
平成二十三年度	二五七九人
平成二十四年度	二九七一人
平成二十五年 二月末	三四二四人
総数	一三三七一人

### 建学史料室からのお願い

#### ▼史料収集

世耕弘一先生、政隆先生、弘昭先生ご生前の関係史料(出版物、書簡、写真、録音テープ、ビデオ、その他何でも結構です)を、現在もお手元に保管されている方々に、その関係史料のご寄贈又は複製でのご提供を賜りたく、当史料室では広く皆様方にご協力をお願いしております。

詳細につきましては、史料室へご一報いただければと思います。

#### ▼ホームページ

不倒館の開館日・時間は、近畿大学ホームページ「不倒館」創設者世耕弘一記念室」のサイトでお知らせしております。

近畿大学ホームページのトップ右下にある(不倒館 創設者世耕弘一記念室 立像の画面)を選択してください。

#### お問い合わせ先

〒五七七・八五〇二  
東大阪市小若江三十四ー一  
近畿大学 建学史料室

電話 (〇六) 四三〇七ー三〇九一  
(ダイヤルイン)

URL <http://www.kindai.ac.jp>